

風七題

小川未明

青空文庫

子どもは、つくえにむかつて、勉強べんきようをしていました。秋あきのうすぐらい日ひでした。柱時計はしらどけいは、カツタ、コツト、カツタ、コツトと、たゆまず時ときをきぎんでいましたが、聞きなれているので、かくべつ耳みみにつきません。それより、高たかまどの、やぶれしように、風かぜのふくたびに、かなしそうな歌うたをうたうので、子どもは、じつと耳みみをすますのでした。

風かぜはときには、沖おきをとる汽船きせんの笛ふえとも、調子ちようしを合あわせましたし、また、空そらに上あがるたこのうなりとも、調子ちようしを合あわせました。

子どもは、これを聞いて、よろこんだり、うれしかったり、もの思いにふけつたりして、勉強をわすれることができました。子どもには、さまざまな、風の歌が、わかるのでした。

二

東京から、兄さんが、帰ってくるというので、子どもは、停車場へ、むかえにきました。

一人、さくにもたれて、汽車のつくのをまっていると、そばに、きれいな女の人が、かばんをさげて立っていました。

そよ風が、その人の、長いもとをかえし、ほつれ毛をふいて、

いいにおいをおくりました。子どもは、やさしいすがたが、したわしくなりました。

そのうち、汽車がつくと、女の人は乗りました。けれども、兄さんは、帰ってきませんでした。

子どもは、かなしみをこらえて、田んぼの細道を、わが家の方へもどりました。

青田の上を、わたる風が、光の波をつくり、さっきの、きれいな人のまぼろしがうかぶと思うと、はかなく、きえてしまいました。

子どもは、口笛をならしました。

三

三人の子どもたちが、広い空き地で、遊んでいました。そこには、くるみの木、くりの木、かきの木、ぐみの木などが、しげつていました。

一人が、くるみの木へのぼって、ハーモニカをふきました。一人は、くりの木の^き下^{した}で、竹^{たけ}ぎおをもつて、かぶと虫^{むし}をとつていました。もう一人は、ぐみの木のえだをわけて、熟^{じゆく}した実^みをさがしていました。

このとき、ゴウツと音^{おと}をたて、風^{かぜ}が、おそいました。すると、とんぼが、うすい羽^{はね}をきらめかしながら、ふきとばされてきまし

た。

「やんまだぞう。」と、さおをもった、子どもが、さけびました。空は、みどり色に晴れて、太陽は、みごとにさいた花のごとく、さんらんとかがやきました。

また、ひとしきり、風がわたりました。そのたびに、木々のえだが、波のごとくゆれて、ハーモニカの音も、きえたり聞こえたりしました。

四

夏の晩方のこと、いなか町を、馬にから車をひかせて、ほお

かむりをした馬子^{まご}たちが、それへ乗^のつて、たばこをすつたり、うたをうたつたりしながら、いく台^{だい}となくつづきました。

ガラツ、ガラツと、そのわだちのあとが、だんだん、遠^{とお}ざかつた時分^{じぶん}、こんどは、ドンコ、ドンコと、たいこをたたいて、町^{まち}の中^{なか}を、旅芸人^{たびげいにん}をのせた、人力車^{じんりきしゃ}が、列^{れつ}をつくつて、顔見世^{かおみせ}に、まわりました。

あかね色^{いろ}をした、夕空^{ゆうぞら}には、火^ひの見^みやぐらが、たつていました。そのいただきに、ついているブリキの旗^{はた}が、風^{かぜ}の方向^{ほうこう}へ、まわるたびに、音^{おと}をたてました。

湯屋^{ゆや}から、手ぬぐい^てをぶらさげて、出^でてきた、おじいさんが、上^{うえ}をあおいで、

「ああ、北風きたかぜか、あすもお天気てんきだな。」と、ひとりごとをしました。

また、往來おうらいでは、子どもたちの、たのしそうにあそんでいるわめき声ごえがしていました。

五

すこしの風かぜもなく、木の葉はも、じつとしてうごかず、まるで湯ゆの中なかにひたつたような、むしあつい晩ばんでありました。みんな、うちにいられぬとみえて、外そとで話し声はなごえがしました。わたしも出でてみると、みんなが、あちらのすずみ台だいへあつまつて、うちわをつか

っていました。

わたしも、そこへいって、こしかけました。だんだん、夜よがふけると、どことなくしめつぽく、ひえびえとしてきました。畑はたけでは、つゆをしたって、うまおいが、なっていました。

「どれ、だいぶすずしくなったから、はいつてねましようか。」
と、一人ひとり、立たちました。

「みなさん、おやすみなさい。」と、また、一人ひとり立たちました。

このとき、あちらの、黒くろい森もりの頭あたまへ、ほんのりと白しろく、乳ちちをながしたように、天あまの川がわが見みえました。

六

昼ひるごろから、ふきはじめた風かぜは、だんだん、暮くれがたへかけて、
 大おおきくなりました。

「いよいよ、台たい風ふうが、やってきたかな。」

「なんだか、頭あたまのおもひ日ひですネ。」

道みちをいく人ひとの、こんな話はなし声こゑが、耳みみへはいました。

ぼくは、おとなりの正しょうちゃんふたりと二人で、カチ、カチと、ひよう
 し木ぎをたたいて、近きん所じよを、火ひの用よう心しんにまわりました。

もう、日ひがくれたのだけれど、ふしぎに、空そらは明あかるくて、けわ
 しい雲くもゆきが、手てにとるように、見みえました。

「この風かぜは、南なん洋ようから、ふいてきたんだね。」と、ぼくが、い

うと、正ちゃんしょうちゃんは、立ちどまつて、空そらをながめ、
 「死しんだ兄にいさんが、あの雲くもに乗のつてこないかなあ。」と、いいま
 した。

風かぜは、間あいだをおいて、ふきました。なまあたたく、しめつぽく
 て、ちようど、大おおきな海うみのため息いきのようでありました。

七

子こどもは、床とこの中なかで、ふと目めをさしました。すると、外そとでは、
 こがらしがふいていました。

その、風かぜの音おとのたえまに、遠とおくの方ほうで、犬いぬのほえるのが聞きこえ

ました。

「どこで、ないているのだろう。」と、子どもは、耳をすまして
 いました。そのうちに、ねむって、ゆめを見たのであります。自
 分は、犬の声をたよりに、広い野原を歩いていました。月の光は、
 真昼のように、くまなくてらしていました。犬の声は、野原のは
 ての村から、聞こえるのでした。

やがて、あかりが、ちら、ちら、見えたので、そこまで、たど
 りつくと、まだ一軒、ねずにおきている家がありました。自分は、
 まどへせのびをして、ガラス戸のうちをのぞくと、お母さんらし
 い人が、病気でねていました。そのまくらもとへ、小さな女の
 子がすわって、看病をしていました。

「ああ、感かん心しんなことだ。」と、思おもつて、自じ分ぶんは、なにかいおう
として、あせると、目めがさめてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「子どもの村」

1948（昭和23）年7月

※表題は底本では、「風《かぜ》七一題《だい》」となっていて
す。

※初出時の表題は「風と子ども」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風七題

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>